Kiryu Junior College

# 短期大学看護学生における死に対する態度
## －学年別による比較－

# The Perspective toward Death in Students of College of Nursing
## -The Comparison of Each Grade in School-

砂賀　道子，鈴木　はるみ，佐藤　幸子，澁谷　貞子


## 要　約

看護学生が死をどのように認識しているか，また，さまざまな要因が死に対する態度とどのような関連をもっているか，学年別に明らかにすることを目的とし，短期大学看護学生343名に対しアンケート調査を実施した．死への態度を明らかにするためにGesserらが開発し，河合が作成した死に対する態度尺度を用いた．新入生は，中立的受容が有意に低く，卒業生は回避的受容が有意に高かった．この結果から，新入生は死を人間の死と捉えにくく，自然の出来事として受け入れにくい．卒業生は学年の進行により，死の受け止め方や考えが変わってくると示唆された．


キーワード：看護学生，死に対する態度，学年別，死別体験

## はじめに

死は誰にでも必然的に訪れるものであり，必ずしも老後にやってくるとは限らない．核家族化の進行や医療のあり方の変化などに伴って，若者が身近な人の死に直面する機会は，以前と比べると著しく少なくなっている[1]．死について考えるのは，テレビや新聞などで報道される事件や事故による死に関するニュースや，ドラマやゲームを契機にしていることが多い．

藤井[2]は，大学生の死観の構成概念を，「スピリチュアルな側面」「生命の終わり」「現実的客観的側面」「死に対する感情」「大切な人との別離」「孤独と未知」「漠然」「行為の中断」と報告している．また，看護学生は，死に対して「怖い」「寂しい」「苦しい」イメージととらえ[3]，關戸[4]は，死を否定的イメージで捉えていると述べている．

看護学生は死について考える機会があり，死が身近にある環境に置かれている状況の中で，死をどのように認識しているのか．死別体験の有無や入学直後・学年，または卒業間近な学生によって相違が見られるのか．看護学生の死に対する態度を把握しておくことは重要である．

これまで，死に対するイメージについての研究は数多く[3)4)5)]，死に対する態度においてKJ法による研究は報告されている．しかし，死別体験の有無による死に対する態度についての研究は極めて少ない[2]．そこで，今回，看護学生が死をどのように認識しているか，また，さまざまな要因が死への態度とどのような関連をもっているかについて学年別による比較を行い明らかにした．

## 研究目的

看護学生が死をどのように認識しているか，また，さまざまな要因が死への態度とどのような関連をもっているか，学年別に明らかにすることを目的とした．

## 用語の操作的定義

1．死に対する態度

死に対する態度とは死に対する認識である．学生が死をどのように認識しているか，宗教や神仏への祈り，死への恐怖，死後の世界などについての認識を死に対する態度とした．



NII-Electronic Library Service

Kiryu Junior College

## 研究方法

1．調査対象

短期大学看護学科の新入生92名，2年生100名，3年生78名，卒業生73名，総計343名（男性30名，女性281名）．

2．調査期間

2005年3月10日～4月20日に自記式質問紙調査票を配付，記入後に質問紙を回収した．

3．調査方法

死への態度を明らかにするために，基本属性と死に対する態度を自記式質問紙調査票を用い調査した．

1）基本属性

基本属性は学年，性別，年齢，家族との同居の有無，信頼できる友人の有無とした．

2）死に対する態度

死に対する態度を把握するために，Gesser[6]らが開発し河合[7]が作成した，死に対する態度尺度（下位尺度；死の恐怖，積極的受容，中立的受容，回避的受容）4因子20項目を用いた．死の恐怖は，死そのものに対する恐怖と死に方に対する恐怖を含んでいる．この尺度の測定対象者は，青年期・成人一般であり，内的整合性及び因子的妥当性が認められている．下位尺度の積極的受容は，死後の世界への期待から来る受容である．中立的受容は，死に対する客観的態度から来る受容であり，回避的受容は，現世の否定的状況からの回避による受容である．

4．分析方法

母集団を把握するために，調査対象の属性について集計を行い，死に対する態度尺度の得点の平均値と標準偏差を算出した．統計的手法として，t検定・一元配置分散分析・多重比較を算出した．データ分析はEXCEL2000に入力し，JAMP IN4.0を用いた．有意水準は，5%未満とした．

5．倫理的配慮

この調査は，死に対する態度に関することから検討し，純粋に教育研究の検討を目的に行うものであること．また，記入の有無によって成績に影響すること及び個人的に不利になることは絶対にないこと，この調査の依頼を拒否・中断する権利があり，研究としてまとめ公表する際には個人が特定できないようプライバシーの保護・秘密は厳守する旨を調査用紙の表紙に文書で明記し，尚かつ口頭でも説明し同意の得られた学生である．

## 研究結果

短期大学看護学生を対象とし，自記式質問紙調査票を配付した結果，回答が得られた343名中，有効回答は311名（回収率90.6%）であった．

1．基本属性

対象の基本属性は表1に示した通りである．学生の性別は女子学生281名（91%），男子学生30名（9%）であった．学年別では新入生が68名（22%），2年生96名（31%），3年生76名（24%），卒業生71名（23%）であった．平均年齢は19.8±1.7歳である．家族との同居は，「同居」189名（61%），「別居」が121名（39%）であった．信頼できる友人については，信頼できる友人が「いる」263名（85%），「どちらともいえない」41名（13%），「いない」5名（2%）であった．

表1　基本属性　N=311

| 項目 | カテゴリー | 人数(%) |
|---|---|---|
| 性別 | 女性 | 281(91) |
| | 男性 | 30(9) |
| 学年 | 新入生 | 68(22) |
| | 2年生 | 96(31) |
| | 3年生 | 76(24) |
| | 卒業生 | 71(23) |
| 家族との同居 | 同居 | 189(61) |
| | 別居 | 121(39) |
| 信頼できる友人 | いる | 263(85) |
| | どちらともいえない | 41(13) |
| | いない | 5(2) |

2．死に対する認識

宗教をもっているかについては，「もっている」が41名（13%），「もっていない」が267名（87%）であった．神仏に祈ることがあるかについては，「はい」173名（56%），「どちらともいえない」75名（24%），「いいえ」61名（20%）であった．死を恐怖と感じるかということについては，「感じる」197名（64%），「どちらともいえない」90名（29%），「感じない」23名（7%）であった．死後の世界はあると思うかについては，「ある」122名（39%），「どちらともいえない」146名（47%），「ない」43名（14%）であった．死の準備教育という言葉を知っているかについては，「はい」74名（24%），「いいえ」230名（76%）であった（表2）．



NII-Electronic Library Service

Kiryu Junior College

表2　死にたいする認識　N=311

| 項目 | カテゴリー | 人数(%) |
|---|---|---|
| 宗教 | 有 | 41(13) |
| | 無 | 267(87) |
| 神仏に祈る | はい | 173(56) |
| | どちらともいえない | 75(24) |
| | いいえ | 61(20) |
| 死を恐怖 | 感じる | 197(64) |
| | どちらともいえない | 90(29) |
| | 感じない | 23(7) |
| 死後の世界 | ある | 122(39) |
| | どちらともいえない | 146(47) |
| | ない | 43(14) |
| 死の準備教育 | 知っている | 74(24) |
| | 知らない | 230(76) |

3．死別体験

身近な人との死別体験者は240名（77%）で，その人との続柄は，「祖父母」が最も多く160名（51.4%），次いで，友人27名（8%），「曾祖父母」24名（8%），「おじ・おば」17名（6%），「両親」10名（3%）「いとこ」2名（0.6%）であった．死別体験無しは71名（22%）であった（表3）．

表3　死別体験　N=311

| 項目 | カテゴリー | 関係 | 人数(%) |
|---|---|---|---|
| 死別体験 | 有 | | 240(77) |
| | | 祖父母 | 160(51.4) |
| | | 友人 | 27(9) |
| | | 曾祖父母 | 24(8) |
| | | おじ・おば | 17(5) |
| | | 両親 | 10(3) |
| | | いとこ | 2(0.6) |
| | 無 | | 71(23) |

4．死に対する態度

対象者の死に対する態度を測定するために，死に対する尺度を用いた．クロンバックの$\alpha$係数は0.67で，死に対する尺度との関連は表4に示した．

1）学年別による比較

学年と死の恐怖との関連においては，新入生は，他の学年より死の恐怖が高い傾向がみられたが有意差はなかった（p=0.074）．学年と積極的受容との関連においては，3年生は，他の学年より積極的受容が高い傾向がみられたが有意差はなかった（p=0.626）．学年と中立的受容との関連においては，新入生は，他の学年より中立的受容が有意に低かった（p=0.040）．学年と回避的受容との関連においては，卒業生は，他の学年より回避的受容が有意に高かった（p=0.0006）（表4）．

2）死に対する認識

神仏に祈る者は，祈らない者より死の恐怖が有意に高かった（p=0.0058）．死後の世界と積極的受容との関連において死後の世界があると思っている者は，ない者より積極的受容が有意に高かった（p<.0001）．また，死後の世界がないと思っている者は，回避的受容が有意に高かった（p=0.0094）．宗教と死の態度との関連においては，宗教を持っていないものの方が積極的受容，中立的受容，回避的受容が高い傾向がみられたが，有意な差は認められなかった．

3）死別体験

死の恐怖と関連する要因は，死別体験有りでは死別経験無しより死の恐怖が低いが，有意な差は認められなかった（p=0.0682）．

4）属性との関連

性別と回避的受容との関連において，男性は女性より回避的受容が有意に高かった（p=0.020）．性別と中立的受容との関連においては，男性は女性より高い傾向がみられたが有意差はみられなかった．また，死への恐怖，積極的受容との関連においては，女性の方が男性より高い傾向がみられたが有意差はみられなかった（p=0.469）（表4）．

信頼できる友人と回避的受容との関連においては，信頼できる友人がいない者は，友人がいる者より，回避的受容，が有意に高かった（p=0.0001）．

## 考　察

死は人類にとって普遍的なものであるが，人の死に対する態度やイメージは決して普遍的なものではなく，時代や社会の状況に伴って変化しているといえる[2]．

1．死に対する認識

本研究においては，死後の世界があると思っている者は，積極的受容が有意に高い結果が認められた．關戸[8]は，死後の世界を信じることは，死に対する嫌悪のイメージを弱める要因となる，つまり，死後の世界を信じることは，死に対し好感があると示唆し，本研究と類似傾向の結果となっている．未知の体験である死は，漠然とした不安と死に対しての疑問や不確実性への自覚から，恐怖と不安が強まり死後の世界への支えとなり，死を積極的に受容するの



NII-Electronic Library Service

Kiryu Junior College

表4　死に対する態度尺度　N＝71

| 死別体験 | 有 | 無 | | | 有意確率 |
|---|---|---|---|---|---|
| | n＝240 | n＝71 | | | |
| | Mean±SD | Mean±SD | | | |
| 死の恐怖 | 21.03±0.29 | 22.21±0.57 | | | 0.0682 |
| 積極的受容 | 10.21±0.17 | 10.12±0.33 | | | 0.8174 |
| 中立的受容 | 9.01±0.14 | 8.86±0.27 | | | 0.6295 |
| 回避的受容 | 12.97±0.25 | 12.78±0.49 | | | 0.7253 |
| 学年 | 新入生 | 2年生 | 3年生 | 卒業生 | 有意確率 |
| | n＝68 | n＝96 | n＝76 | n＝71 | |
| 死の恐怖 | 22.32±0.55 | 20.73±0.47 | 21.68±0.52 | 20.59±0.54 | 0.0748 |
| 積極的受容 | 10.13±0.33 | 10.00±0.27 | 10.53±0.31 | 10.14±0.32 | 0.6266 |
| 中立的受容 | 8.29±0.26 | 9.17±0.22 | 9.19±0.25 | 9.14±0.26 | 0.0405 |
| 回避的受容 | 11.55±0.47 | 13.52±0.39 | 12.42±0.44 | 14.02±0.46 | 0.0006 |
| 性別 | 女性 | 男性 | | | 有意確率 |
| | n＝281 | n＝30 | | | |
| 死の恐怖 | 21.34±0.27 | 20.70±0.84 | | | 0.4697 |
| 積極的受容 | 10.25±0.16 | 9.56±0.49 | | | 0.1876 |
| 中立的受容 | 8.96±0.13 | 9.16±0.40 | | | 0.6323 |
| 回避的受容 | 12.76±0.23 | 14.53±0.71 | | | 0.0204 |
| 神仏に祈る | はい | どちらともいえない | いいえ | | 有意確率 |
| | n＝173 | n＝75 | n＝61 | | |
| 死の恐怖 | 21.98±0.34 | 20.82±0.52 | 19.88±0.58 | | 0.0058 |
| 積極的受容 | 10.38±0.20 | 10.24±0.31 | 9.60±0.35 | | 0.1589 |
| 中立的受容 | 8.99±0.17 | 8.89±0.25 | 9.06±0.28 | | 0.9019 |
| 回避的受容 | 12.50±0.29 | 13.72±0.45 | 13.06±0.50 | | 0.0803 |
| 信頼できる友人 | いる | どちらともいえない | いない | | 有意確率 |
| | n＝263 | n＝41 | n＝5 | | |
| 死の恐怖 | 21.21±0.28 | 22.04±0.72 | 17.80±2.07 | | 0.1371 |
| 積極的受容 | 10.20±0.16 | 10.39±0.42 | 7.60±1.22 | | 0.0956 |
| 中立的受容 | 8.90±0.13 | 9.39±0.34 | 10.20±0.99 | | 0.2102 |
| 回避的受容 | 12.52±0.23 | 14.68±0.59 | 20.40±1.70 | | <.0001 |

ではないかと考えられる．死後の世界は想像しかできない世界で，死から遠ざけられていることにより，死を恐れている反面，天国や死後の世界が支えとなり来世への期待から死を積極的に受容していくのではないかと推察できる．逆に，死後の世界がないと思っている者は，回避的受容が有意に高くなっている．つまり，死は自分の死でなく他人の死であるという認識があるため，現実から回避することにより死を受容するのではないかと推察される．

本調査では，77％の学生が死別体験をし，その関係は祖父母が最も多く，死への態度との関連において有意差はなかった．藤井[2]の研究においても，死別体験と死への不安に対する関連はみられなかった．調査内容の相違はあるが，本研究と類似の結果となっている．

病院死が80％を越える現在において，身近な人の死に直面する機会は，著しく少なくなっている．青年期における死別体験は，死別体験の有無のみではなく，死別体験した時にどのように思索したか，また，時期や関係性が影響するのではないかと考えられるが，本研究ではそこまでの調査はしていない．死別体験と死への態度については，今後の課題としたい．

2．学年別による比較



NII-Electronic Library Service

Kiryu Junior College

本調査の結果，新入生は，他の学年より中立的受容が有意に低く，卒業生は，他の学年より回避的受容が有意に高かった．川戸[9]は，死を積極的に受容する学生は，死を死後の天国や来世，永遠性と結びつけて捉えており，逆に死を回避的に受容する学生は，人生においてその重要性を認めず，死を取るに足らないものと捉えていると大学生を対象にした研究で述べている．

卒業生は，死生観・脳死・自殺などの講義や，成人看護学実習においてのターミナルケア・緩和ケアを通し，死について考える機会が多く，学年の進行により死の受け止め方や死に対する考えが変わってくると推察される．岡田[5]は，学校における学習のみならず，医療・福祉施設での実習で実際に病んでいたり，老いていく現実を目の当たりにしたことに起因すると述べている．死は自分の死ではなく，他人の死であるという認識があり，人の死は誰もどうすることもできないと，生のあきらめとして死をとらえる傾向にあるのではないかと考えられる．

新入生は，テレビや新聞などで報道される事件や事故によるニュースや，ドラマやゲームから死に接するが，考える機会が少ない．死を人間の死と捉えにくく，死を自然の出来事として受け入れにくいのではないかと推察できる．

## 結　論

看護学生は，死後の世界は想像しかできない世界で，死から遠ざけられていることにより，死を恐れている反面，天国や死後の世界が支えとなり来世への期待から死を積極的に受容していく．また，死は自分の死でなく他人の死であるという認識があるため，現実から回避することにより死を受容するという死に対する認識が示唆された．

学年別では，新入生は，死を人間の死と捉えにくく，死を自然の出来事として受け入れにくい．卒業生は，学年の進行により死の受け止め方や死に対する考えが変わってくると示唆された．

## 引用文献


1）勝俣暎史：若者の死生観．教育と医学，624：523-529，2005.

2）藤井美和：大学生の持つ『死』のイメージ：テキストマイニングによる分析．関西大学社会学部紀要，95：145-153，2003.

3）齋藤英子ら：大学生の死のイメージに関する研究～TEG・Self-Esteem・身近な人の死の経験による分析～．群馬保健学紀要，23：49-53，2002.

4）關戸啓子，菊井和子：死に対するイメージ－看護学生と主婦の比較．ホスピスケアと在宅ケア，5（3）：296-300，1997.

5）岡田まりら：看護学生の死のイメージに関する研究．三重看護学誌，3：53-59，2000.

6）Gina Gesser：Death Attitudes Across The life-Span：The Development And Validation Of The Death Attitude Profile. OMEGA, 18（2）：113-128, 1987.

7）河合千恵子ら：老年期における死に対する態度．老年社会科学，17（2）：107-116，1996.

8）關戸啓子ら：死に対するイメージとその形成に影響を与える要因の検討．看護総合，26：20-22，1995.

9）川戸真由美：現代人の死観とDeath Education．関西学院大学卒業論文，2003.




NII-Electronic Library Service

Kiryu Junior College

# The Perspective toward Death in Students of College of Nursing
## -The Comparison of Each Grade in School-

Michiko Sunaga, Harumi Suzuki, Sachiko Sato, Teiko Shibuya

## Abstract

We conducted research on how students perceived, and how various factors impact on their attitudes toward death to identify their perspectives from each grade level with using attitude scale.

The data showed extremely low score in neutral acceptance toward death by freshmen, and extremely high score in negative acceptance by post graduate students.

From the finding, it is suggested that freshmen do not tend to define death as human death and to post graduate students toward death alters as their grade in college advanced.

Keywords : Nursing students, Attitude toward death, Category of each grade in school



NII-Electronic Library Service